

初年次教育における小論文作成過程の質的研究： 情報リテラシー教育に求められる学習資源と支援

小松 泰信・川崎 千加

Qualitative research of the short article writing process in the first-year experience for University Students -Study resources and support required for information literacy education-

Yasunobu Komatsu, Chika Kawasaki

抄 録

大学初年次教育における小論文作成過程について、論文完成時に作成の各段階を振り返る記述アンケートを Learning Management System で実施し、その記述内容の分析をおこなった。論文作成の各ステップで学習活動の内容が変容する過程が明らかになると共に、多くの学習者が直面する情報探索上の共通した困難と、それを克服するための Peer Support を含めた支援が存在した。

キーワード：大学初年次教育、情報リテラシー、内容分析、図書館、アカデミックライティング

(2011年10月1日受理)

Abstract

This study examined the process of writing short papers in the first year of university. When the papers were completed, students answered a questionnaire about the process at each stage of writing. Utilizing a Learning Management System, the survey data were analyzed. While the changes at each step in the process of study activities became clear, support including peer support in particular was found to overcome common difficulties which many students face in searching for information.

Key words: The First-Year Experience for University Students, Information literacy, Content analysis, library, Academic Writing

(Received October 1, 2011)

I . はじめに

学士課程教育において「何ができるようになるか」(中央教育審議会, 2009, p. 8)を重視した取り組みに対応する学習成果の評価が求められている。その前段に「自分ではできない」という失われた自己効力感の回復をはかることが、大学における初年次教育の課題のひとつである。濱名(2004, p. 39)によれば、入学後の学習にかかわる経験に関して、課題やレポートのためのインターネット利用が急増することが認められる一方で、入学直後の取り組みに際して、最も自信が改善しうるのは「文章作成能力」であるという。また問題解決学習・プロジェクト学習等を推奨する流れの中で、学習者主体の授業外プロジェクトを主な学習活動に設定する動きが見られる。何らかのレポートや小論文を課題として設定する取り組みは少なくないが、我が国における大学の情報リテラシー教育における学習成果の評価は、学習成果物や主体的学習過程の分析には量的なアンケート手法を除いて十分にアプローチできていないのが現状である。

先行研究として日本語リテラシーや英語のプロセス・ライティングにおける文章表現の指導に関する研究がなされているが、数十名レベルのサンプル分析にとどまっている。情報探索を含む情報リテラシー科目における質的分析はさらに少なく、作成プロセス全体を把握した分析はほとんど行われていない^{注1}。大島(2007)はレポート作成を求める初年次必修科目の履修者(30-50人)に対し、コース終了後にプロセス別自由記述式アンケートを実施し、ライティングプロセスに関して学生が感じる困難などを質的に分析している。このような記述式アンケートの分析は少なく、留学生を対象とした日本語によるレポート指導におけるライティングプロセスの課題について、自由記述のアンケートを実施したものの(舟橋, 2010)や、論文作成の段階で行った相互評価のコメント分析によって論文執筆による学習効果について検討しているものが若干見られた。これらも調査対象は数名から40名程度である。情報リテラシー科目ではPC操作のスキルに重点が置かれ、特に学生の情報探索行動に視点を絞ったものとして、種市&逸村(2006)や中島、土方&西田(2004)の論文が見られるが、作成過程全体を俯瞰し、各プロセスでの学習効果、課題を分析したものはほとんど見られない。こうした学習成果物が学習者の主体的活動の中でどのように生成されたかを追跡する方法は必ずしも確立されていないといえるのではないだろうか。

従来から、授業内容の改善を目的として授業評価アンケートが実施されている。一般的に量的に収集された選択式の評価項目を集計することで授業内容を評価する。一方で、授業に関する要望や感想として記述アンケート項目を付加的に設定しているものもある。

大阪女学院大学及び短期大学の情報リテラシー関連科目においては、大学全体で実施する評価項目に加えて、科目固有の学習到達目標が達成されたかについても設問を設けて量的評価を実施してきた。これらは、授業内にとどまらず、設置基準にうたわれた学習に必要な教室外学習を含めた標準45時間の学習成果全体を測定の対象にしている。

当科目では、90年代から図書館を主な学習フィールドとして、小論文作成のプロジェクトを設定してきた。各学習者は、授業外で一定の手順に沿って学習活動を全体的に自主

管理で進めなければその課題を仕上げることはできない。ところが前述の選択式設問による量的な評価だけでは、学習者が進める系統的調査手順の全体的進行を測定することは困難であった。それを知るためには、学習者の中でそれぞれ固有の学習プロセスを記述形式で回答してもらい、それに対して質的分析をおこなうことが有効ではないかと考えられる。本論では、その諸活動に必要な図書館や資料等の学習資源がどのように活用されたかを視野に入れながら、小論文完成直後に提出された学習者の段階的記述回想の内容分析を通じて、情報リテラシー教育に求められる学習支援のあり方を検討する。

Ⅱ．研究の概要

2. 1 本研究の目的

本論の目的のひとつは、大学初年次教育の情報リテラシー科目において課された小論文作成の過程で、各学習者がどのように課題と向き合い、作成に至ったかを知ることにある。この各段階で、学習者が困ったことや役だったことが何であるかを調査することは、今後の授業内容の改革につながるものとする。今ひとつは、小論文作成過程において図書館をはじめとする学習資源や友人を含む学習支援者がどのように機能し、活用されているかを把握することで、今後の学習支援や教育学習方法の改善に役立てることである。

2. 2 調査の対象

今回対象とした科目は、大学の「情報の理解と活用」及び短期大学の「研究調査法」である。コンテンツ内容は多少異なるものの、半期 15 週全体を通じて、共通フォーマットで 4,500～6,000 字の小論文を最終課題として提出する構造は共通している。授業では、各自が自由に設定したテーマに基づき、事前調査、情報検索、論文アウトラインの作成、批判的読解、情報の記録と組織化、執筆とプレゼンテーションといった各段階に沿った系統的調査手順を進める点でも共通項がある。授業クラスは、20～30 名程度の集合学習を実施している。

上記小論文に関する調査研究は、授業外で実施される。その授業外活動も視野に入れて全クラスが、LMS (Learning Management System) を利用した e ラーニングを実施している。最終課題を含む各課題・テストや多様な授業外支援は、LMS を用いて常時実施されている。

2. 3 調査の方法

2. 3. 1 設問について

この調査は、一般の授業評価アンケートとは別に、論文提出の前後 4 日間程度の間に、小論文に特化して小論文作成の過程を振り返って 10 のステップに分けて、記述で答える形式で提出することになっている。ここでの各ステップは、教育側が設定したステップであるが、各週の授業スケジュールはこのステップに沿って運営され、スタート時に全体スケジュールが説明される。設問は、「論文作成の各ステップをふりかえり、その時の状況や苦心したことを述べてください」としている。

各ステップとは「Step 1 題材選び」「Step 2 事前調査」「Step 3 仮アウトライン作成」「Step 4 関連文献の調査」「Step 5 利用文献の入手」「Step 6 情報カードの作成」「Step 7 最終アウトラインの作成」「Step 8 執筆と校正」「Step 9 出典の表示」「Step 10 仕上げ」の10段階である。さらにこちらが設定したステップに縛られない学習者の自由な記述を「自由コメント」として寄せてもらった。各段階の状況報告は、各週ごとにアンケートを収集する方法も考えられるが、授業冒頭で説明される各ステップの意味や系統的調査の重要性を本当に理解するのは、論文を書き終えたタイミングであるということが学生自身の授業後のコメントから得られたため、論文完成時の最も作成過程全体を見渡せる段階で、それらを回想してもらった。

2. 3. 2 データの概要

今回、分析対象にした記述式アンケートは、LMSに蓄積された2008年から2011年前期までの大学および短期大学で提出された記述回答である^{注2)}。この間の履修者は、「情報の理解と活用」が506人で「研究調査法」が615人で総数1,121人である。その内、論文を書き上げアンケートまで提出に至った件数は、「情報の理解と活用」が285件で「研究調査法」が331件で総数616件である。

表1 データの概要

	合計	2008年度	2009年度	2010年度	2011年度
	616	180	205	155	76
情報の理解と活用	285	91	115	79	
研究調査法	331	89	90	76	76

2. 3. 3 分析方法

データは、kncoder^{注3)}をもちいてデータ分析を行った。同システムでは、ChaSen^{注4)}による形態素解析をおこなった上で、抽出された言葉の出現頻度の算出や、それらの言葉が含まれている文書検索やコーディングによる集計をおこなった。

Ⅲ. 調査結果と考察

3. 1 初年次学生のリテラシー状況

近年の学生の質の変容に対応するための初年次教育が注目を集めている。そこでは学生の状況として、学力の低下や学習意欲の低さなどへの対応が指摘されている。多くの初年次教育では読み書きが苦手な学生に対する日本語リテラシーや情報リテラシー教育が実施されている。本学では従来の「情報の理解と活用」及び「研究調査法」に加え、2008年度から「自己形成スキル」において、読みを通した自己省察から将来の自己像を描くキャリア意識の形成を行うことを目指してきた(手嶋, 川崎 & 小松, 2009)。その背景には、

論文作成において求められる基本的な読み、書く力が低い学生が増加していることがあった。読む、書くことによる自己省察は論文作成過程とも連携することで、より積極的に課題と向き合うことも狙いであった。

初年次学生の読みについては、細谷（2010, pp. 57-58）が文学作品を読むことには慣れてはいるが、そこには「客観的、批判的に読もうとする意識が希薄」であり、「情緒的な読みに傾斜しがち」であると指摘している。大学生の新聞離れも指摘されるが、本学においても、入学前の読書の大半は小説などの読み物であり、新聞などの社会的、論述的文章の理解が難しいとする学生が多い^{注5}。また、書くことにおいても「である体」で書くことができない、段落を作ることができない、要約が困難な学生が多いという状況がある。そうした学生にとって、初年次に多くの資料を読み、書くことは、最終的な課題の提出という具体的目標を設定した実践的な学習を通して獲得される必要がある。また初年次でこのようなりテラシーを身につけることは、その後の学習の継続と、質を高める上で不可欠なものであり、学生の状況に応じた授業実践も求められているといえる。

3. 2 調査結果

3. 2. 1 大学生・短大生の比較

2008年から2011年春学期までの大学285名、短期大学331名の各回答から抽出された語数は、大学99,614件、短大120,979件であった。大学・短大を合わせたすべてのステップに関する記述から抽出された語の出現数上位100位までが表2である。これは出現数を単純集計しているため、同義語などは統制されていないが、「論文を書く」という課題に向き合う学生の行動や心理状態の表出がみられる。

同義語や同じ語の漢字表記と仮名表記などを統一し（表3参照）、大学、短大別に抽出語の出現数を比較したものが表4と表5になる。ここではまず心理状態の表出である単語に着目した。抽出語の出現数の比較では、「苦労」「大変」「難しい」といった論文作成過程での負担感を表現する言葉がトップに並ぶなど、大学・短大に大きな有意差は無かった。しかし、大学では19位の「悩む」が短大では12位となり、大学には20位以内に入らなかった「辛い」や「必死」という言葉が短大では20位以内に見られるなど、若干ではあるが論文作成の負担感は短大生の方が強く感じているようである。

表2 抽出語出現数 上位100

順位	抽出語	出現数	順位	抽出語	出現数
1	書く	2,242	51	図書	214
2	思う	1,781	52	見る	204
3	論文	1,475	53	楽しい	203
4	本	1,436	54	表示	179
5	自分	1,253	55	役に立つ	175
6	アウトライン	971	56	決まる	174
7	大変	806	57	一番	171

8	情報	784	58	少ない	171
9	読む	756	59	インターネット	170
10	調べる	690	60	言葉	168
11	図書館	679	61	不安	167
12	難しい	629	62	感じる	162
13	苦勞	621	63	出典	160
14	たくさん	529	64	良い	158
15	カード	499	65	提出	154
16	文献	489	66	書き方	150
17	資料	482	67	必要	146
18	時間	463	68	初めて	143
19	先生	461	69	学校	141
20	テーマ	458	70	達成	141
21	考える	434	71	字	140
22	作成	427	72	完成	136
23	探す	397	73	行く	135
24	授業	371	74	問題	135
25	内容	358	75	部分	132
26	知る	340	76	違う	130
27	興味	332	77	見つける	129
28	題材	331	78	知識	126
29	引用	330	79	困る	125
30	最終	322	80	結論	124
31	最初	321	81	変える	123
32	作る	317	82	範囲	121
33	調査	317	83	見つかる	120
34	本当に	309	84	人	119
35	多い	307	85	迷う	117
36	書ける	296	86	課題	116
37	少し	277	87	集める	115
38	分かる	269	88	理解	114
39	最後	245	89	子ども	112
40	文章	245	90	事前	111
41	今	242	91	文	111
42	選ぶ	234	92	参考	110
43	悩む	234	93	入手	110
44	雑誌	233	94	仕上げる	106
45	利用	231	95	苦戦	105
46	使う	228	96	言う	105
47	借りる	221	97	簡単	103
48	出来る	220	98	作業	102
49	決める	219	99	パソコン	99
50	関連	215	100	気	99

表3 抽出語の統制例

コード名	統制した抽出語
文献	文献、資料、図書、雑誌、新聞、記事、本
苦勞	苦勞、苦戦、苦痛、悪戦苦闘、一苦勞、苦しい、辛い、手こずる、しんどい、きつい
テーマ	テーマ、題材、主題
難しい	むずかしい、難しい、困難、むつかしい、ややこしい
探索行動	検索、探す、さがす、探索
簡単	簡単、スムーズ、楽
ネット	ネット、インターネット、web、サイト、ホームページ
読み直す	読み直す、読み返す、見直す、見返す

表4 大学抽出語品詞別 上位20位

名詞	サ変名詞	形容動詞	動詞	形容詞
文献 1,266	苦勞 420	大変 353	書く 1,122	難しい 314
論文 701	作成 180	簡単 112	思う 886	無い 305
自分 594	授業 163	不安 63	出来る 571	良い 245
テーマ 555	引用 132	必要 62	分かる 370	すごい 147
アウトライン 443	調査 127	苦手 35	読む 336	多い 138
図書館 292	関連 97	いろいろ 29	調べる 301	楽しい 102
情報カード 237	利用 95	主 27	書ける 217	少ない 84
先生 227	表示 79	好き 26	探す 197	嬉しい 51
内容 171	提出 70	正直 23	考える 185	上手い 47
情報 165	達成 69	非常 23	知る 176	広い 38
最初 162	結論 62	便利 23	作る 169	深い 33
興味 151	理解 61	重要 21	見る 168	面倒くさい 38
最後 130	作業 50	大切 21	見つける 130	長い 30
文章 108	入手 47	様々 20	役立つ 113	細かい 29
言葉 81	完成 46	適当 19	選ぶ 110	早い 27
インターネット 80	プリント 42	嫌 17	借りる 105	詳しい 23
部分 73	苦戦 42	身近 17	使う 100	面白い 20
最終 66	アドバイス 40	大事 16	決める 99	大きい 20
課題 66	後悔 37	ギリギリ 15	悩む 97	新しい 19
出典 65	参考 37	十分 14	決まる 73	遅い 16

表5 短大抽出語品詞別 上位20位

名詞	サ変名詞	形容動詞	動詞	形容詞
文献 1,630	苦勞 349	大変 453	書く 1,169	難しい 397
論文 777	作成 247	簡単 128	思う 947	無い 330
自分 668	授業 208	不安 104	出来る 741	良い 272
アウトライン 532	引用 198	必要 84	読む 424	多い 173
テーマ 407	調査 138	好き 65	分かる 416	すごい 157

図書館	387	利用	136	主	59	調べる	400	楽しい	104
情報カード	291	関連	118	苦手	53	探す	258	少ない	94
先生	234	表示	100	重要	51	考える	251	上手い	75
内容	187	完成	90	大切	46	書ける	203	嬉しい	48
興味	181	提出	84	いろいろ	37	作る	201	長い	46
情報	173	参考	73	様々	32	知る	181	広い	37
最初	159	達成	72	明確	31	悩む	140	詳しい	34
文章	137	入手	63	十分	29	使う	136	深い	34
インターネット	130	結論	62	大事	23	役立つ	134	細かい	33
最後	115	作業	52	正直	22	選ぶ	126	大きい	31
子ども	101	確認	51	ギリギリ	18	決める	123	早い	27
出典	95	理解	48	残念	17	読み直す	118	面倒くさい	26
書き方	93	虐待	45	必死	16	借りる	118	辛い	24
言葉	88	経験	42	便利	16	見る	111	遅い	18
知識	81	成長	42	嫌	15	決まる	101	新しい	17

3. 2. 2 ネガティブな報告

次に、ネガティブな感情とポジティブな感情の表出と見られる言葉を抽出し、どのような側面、段階で学習者が論文作成に対しネガティブ、あるいはポジティブな感情を持つかを把握した。ここではネガティブな報告を中心に検討した。なお、表4、5では「大変」という言葉が形容動詞の1位に位置するが、この「大変」はネガティブな意味での困難さを示すものではなく、「大変だったという」状況の説明に使われているものの他に、「良い」や「嬉しい」などのポジティブな感情の強調として使われているものも含まれており、今回はその分離をしていない。またその他のネガティブな表現として「後悔」が大学の19位に入っているが、今回は共通的に20位以内に検出された言葉である「苦労」や「難しい」といった感情を中心に分析を行った。

3. 2. 2. 1 「苦労」していること

表4及び表5では、「苦労」「難しい」や「不安」といった言葉が比較的上位に現れる。「苦労」については、「苦しい」「苦痛」「苦戦」「悪戦苦闘」「手こずる」「しんどい」「きつい」などをコード化し、これらの言葉から学習者が苦労した事柄、過程を見てみたい。

「苦労」したことにコード化されたデータは951件となり、「苦労」と関連して述べられる語の上位10は表6のようになる。「本」あるいは「資料」などは、論文の参考とする文献が少なく苦労したや、探せない、見つからないといったコメントである(資料1、2参照)。また後述するように「本を読む」ことに苦労したというものが6番目に多く、実際に資料を手にする段階で、テーマに沿ったものを探しきれないことや、論述的な文章に慣れていないために読めるような資料を見つけられなかったということも考えられる。雑誌記事は難しいと感じる学生も多く、読むことに慣れていなければ専門書を読むの

にも苦勞する。

表6 「苦勞」群と関連する語

抽出語	全体	共起
書く	1,914 (0.178)	167 (0.186)
本	1,262 (0.117)	134 (0.149)
自分	1,188 (0.111)	123 (0.137)
アウトライン	870 (0.081)	96 (0.107)
情報カード	717 (0.067)	67 (0.074)
読む	682 (0.063)	64 (0.071)
資料	455 (0.042)	66 (0.073)
テーマ	411 (0.038)	52 (0.058)
考える	408 (0.038)	46 (0.051)

次に4番目のアウトラインは、第4週の仮アウトラインに関する設問と、第10週に作成する最終アウトラインに関する設問があるため件数が多くなっている。しかし、記述内容には特色があり、仮アウトラインより最終アウトラインで「苦勞」したとする記述が多く見られる。仮アウトライン段階では漠然と書こうとする項目を並べていたが、最終アウトラインの段階では各自がテーマに関する資料を読み、知識や情報を得た段階で、より具体的に自身の論文のストーリーを構築することになる。しかし、仮アウトラインからテーマや視点が大きく変化したり、資料を読む中で何を書きたいかが整理できなくなることもある。あるいは、資料が読めずに仮アウトラインの段階から具体化することができないといった学習者の状況が浮かび上がる。

仮アウトラインでは、書きたいことが明確であれば、それほど苦にすることなく作成できるが、テーマが決まらない場合や絞りきることができない場合には苦しいと感じている。この段階が長く続くと、焦りや不安が増すことになる。以下は仮アウトラインに対する記述例である。

「いまいち内容をつかんでなかったの、仮アウトラインを作るのも苦勞した。結局このアウトラインは作り直しました。」

「何を調べたいのか決まっていなくてアウトラインを作るのに苦勞しました。図書館に行きまわりました。そして、本を探しまわりました」

「仮アウトラインは苦勞しました。自分の中でなにについてどのように調べようかハッキリしていなかったので、難しく感じました。」

「もともとアウトライン作成は苦手だったので、その時はすごく悩んで書きました。(主に何

に焦点を当てて書くのかなど…。』

「アウトラインなんて今まで作ったことがなかったし、本の目次を参考に必死で考えたことを覚えている。アウトラインができて、そのアウトラインに見合う内容の資料がなくて、何度も書き直した。」

また、最終アウトラインでは、仮アウトラインで苦労した場合はスムーズに作成できたとする記述もあり、問題意識やテーマに対する視点が明確にならない場合に「苦労」や「苦しい」と感じる事が推察できる。さらに最終アウトラインで、情報や知識を得たことで逆に何を書きたかったのか分からなくなるといった混乱を招くこともある。

「最終アウトラインは私にとって最も苦労したものでした。論文とは何を書けばいいのか、ますます分からなくなって、結局論文を書き始めても決まりませんでした。私は、論文を最終アウトラインもできていない状態で書き始めました。」

5番目の「情報カード」であるが、当科目における「情報カード」は実際に論文に引用するかもしれない文章や言葉と出典表示を記録するカードであり、複数の資料を読み論文の元となる情報を収集する作業となる。課題としては最大40枚以上の情報カードの提出を求めるが、枚数だけを考慮して作成した場合、本文を書く段階になり引用できる文章が無いといったこともおこる。ここでの読みは、自身のテーマに関する意見や発想の再検討、新たな事実の発見、検討すべき課題の発見などを伴うものであり、深く資料を読み込んだり、足りない部分について資料を追加するなど、思考的な作業でもある。最終的な論文の本論にあたる部分の作成につながることもあり、読めない、あるいは資料が改めて足りないことや、資料を読んで初めてテーマの大きさ、複雑さに気づく学生も多い。

6番目には「読む」ことの苦労が報告されている。資料2に付したように日頃本を読む習慣がないために本を読むのが大変だった、多くの本を読むのがしんどかった、雑誌記事や新聞については難しい言葉や文体が多くて大変だったといった報告となっている。細谷(2010, p. 54)が、近年の学生の読みについて「読むことに自信があるわけではないが、ざりとして「読めない」「読めていない」という自覚はさらにはない」という状況に身をゆだねていると述べているように、これほど多くの資料を一時期に読んだ経験や、それらを客観的、批判的に読むことの難しさとはじめて向き合った戸惑いが見られる。8番目の「テーマ」については、初期のテーマ設定で決めることが出来ず苦労したといったものである。

3. 2. 2. 2 「難しい」要素

次に、学生が「難しい」と感じる段階や課題について見てみたい。「苦労」群との関連性が強いが、「難しい」には「むずかしい」「ややこしい」「困難」などを統制した。表7に見るように、資料・文献の他にアウトラインやテーマ、引用などのステップに関わる言

葉が上位に抽出された。表7は「難しい」という言葉と関連して述べられた言葉の上位20件である。この中から各ステップに関わる言葉に注目する。先述のようにアウトラインでは仮アウトラインより最終アウトラインの件数の方が多く、あらためて各自の論文のストーリーを組み立てることに困難を感じるという報告が見られた。ステップの中でも一つの山場となっていることがわかる。

「アウトラインまた細かく分けるのがどうしたらいいかわからなくてちょっとでこずった。」

「アウトラインは、難しい。先生など相談した。」

「アウトラインが一番難しくてまったくすすみませんでした。」

「アウトライン辺りから難しく思うようになり、なかなか作業が進まなかった。」

表7 「難しい」と関連する語

	抽出語	全体	共起
1	自分	1,188 (0.111)	98 (0.139)
2	アウトライン	870 (0.081)	66 (0.094)
3	文献	457 (0.043)	34 (0.048)
4	資料	455 (0.042)	36 (0.051)
5	テーマ	411 (0.038)	33 (0.047)
6	考える	408 (0.038)	40 (0.057)
7	探す	368 (0.034)	32 (0.045)
8	内容	341 (0.032)	45 (0.064)
9	引用	295 (0.027)	37 (0.053)
10	文章	229 (0.021)	29 (0.041)
11	選ぶ	227 (0.021)	20 (0.028)
12	関連	207 (0.019)	14 (0.020)
13	決める	205 (0.019)	14 (0.020)
14	表示	174 (0.016)	22 (0.031)
15	感じる	158 (0.015)	25 (0.036)
16	言葉	157 (0.015)	38 (0.054)
17	出典	156 (0.015)	20 (0.028)
18	書き方	146 (0.014)	24 (0.034)
19	違う	129 (0.012)	11 (0.016)
20	見つける	128 (0.012)	12 (0.017)

「文献」には資料と同意で使われているものもあるが、「文献カード」「文献リスト」「文献調査」「関連文献」「引用文献」などの言葉も含まれている。「文献カード」のコメントはほぼ「情報カード」と混同して使われており、41件のコメントがあった。「文献リスト」「引用文献」は論文の最後にAPAスタイルで添付することになっており、その記述が難しいというものが12件ほどであった。一方で引用文献と関連する「出典表示」についても「難しい」や「ややこしい」が12件であった。「文章」については「文章を展開させること」

や「引用した文章をつなげること」、表現の仕方など書くことそのものが難しいとしているものである。また結論を書くのが難しかったとするコメントも8件ほど見られた。論文作成過程で学生が「難しい」と感じる要素は、アウトラインやテーマを考え、資料・文献を探すことに加え、引用文献のリスト、出典表示、文章表現など一定のスタイルに従って論述的な文章を「書くこと」であることが考察できた。

3. 2. 2. 3 論文作成と「不安」

次に、ネガティブな要素として最後に「不安」を取り上げた。表8は不安と関連するものの項目である。

表8 不安関連群

抽出語	全体	共起
1 書く	119 (0.856)	711 (0.463)
2 論文	112 (0.806)	604 (0.393)
3 思う	111 (0.799)	664 (0.433)
4 本	106 (0.763)	574 (0.374)
5 自分	98 (0.705)	564 (0.367)
6 できる	95 (0.683)	497 (0.324)

ここでは6,000字という文字数への不安や、書くこと自体への不安などが述べられている。

「書き始めるまでは不安やったけど、始めるとすらすらできて楽しかった。」

「一個一個ちゃんと引用出来ているのか不安だった。」

「どうやったらそんなに書けるのかまだ書いてもないのにずっと不安だった。」

「本当に六千字も書けるのか？と不安な気持ちで書いていたが、少し詳しく書こうとするだけですぐに終わるものと思った。」

「基本的なことが分からなくて、全てが不安だった。書き始めるのに、結構時間がかかってしまった。」

「書き始める前は書ききれぬかどうか不安だったが書き始めたら意外にすらすら書けた」

「うまくまとまっているかちょっと不安。論文を書くのは本当に難しいと思った。6,000字は未知の世界だったので。」

「初めてこのように論文を書き、書き始める前はとても不安でしたが、書き始めると案外たのしかったです。」

「この授業は始まった時から、論文を書くのがすごく不安でした。」

「不安」の抽出語は「題材選び」の段階で出現頻度が高く、次いで「仮アウトライン

(Step3)、「最終アウトライン (Step7)」以降から最後まで上位3位以内に出現度が高くなっていた。書き上げるまでは自信がなく、不安の中で書いていることが読み取れる。6,000文字という量的な壁に驚きと不安を感じつつ、ともかくも書き終えたことで自身の力で書けたという達成感やその壁を乗り越えたことによる満足感が見られる。成果物の質的な問題は別にして、学習動機が希薄だとされる初年次において具体的課題をこなさなければならない状況を作ることは、こうしたやり遂げたという自信、楽しさをもたらす効果があるものといえよう。

3. 2. 3 ポジティブな要素

前節ではネガティブな要素について概観したが、ここでは論文を作成する中で得られる学生の成長や効果について見てみたい。今回のデータでは表3で抽出した「簡単」の他に、「楽しい」及び「達成」に関する語を分析対象とした。大学短大共に形容詞の3位にあがっている「良い」であるが、ここには「～すれば良かった」や「どうすれば良いかわからなかった」といったネガティブな感情も同時にカウントされ、今回は詳細な分離を行えなかった。大学の17位に位置する「面白い」については、短大では20位以内に検出されており、今回は分析対象としなかったが、調査や論文執筆過程での経験そのものを面白いとするものとテーマに対して面白さを感じたとするコメントが2分していた。

3. 2. 3. 1 プロセス上の「簡単」な要素

まず、「簡単」という言葉をカテゴリーとして、「スムーズ」や「楽」という言葉を統制した。「簡単」はKhcorderによる抽出語リストにおいて形容動詞として分類される。大学・短大とも形容動詞の2番目に出現頻度の高い語として抽出された(表4、5参照)。

「Step1 題材選び」では、興味のあることをテーマとしたのでスムーズに決定できたとするコメントがある一方、テーマを適当に考えてしまったことへの後悔や反省がカウントされた。この段階での「簡単」は件数としても104件の形容動詞の29番目で、それ以降のStepに比して低い数値であった。Step2から6の情報カード作成の段階までは、「簡単」は10位以内に位置し、文献収集の際に図書を探すのがパソコンで簡単にできた、仮アウトラインは比較的容易に作成したとするものなどであった。しかし、「Step7 最終アウトライン」で10位以下になり、「Step9 出典表示」では再度3番目に出現率が高まる。しかし、「Step10 仕上げ」では再び22番目に低下する。これは前節の「不安」と対応する要素でもある。

後半では出現度は下がるものの、論文執筆時に情報カードが役立ち、スムーズに論文作成が進んだとするものや、引用や出典の仕方などはスタイルや手順を覚えれば簡単だったとするものがそれぞれ数件見られた。逆に、簡単には進まなかったという記述として直接引用は簡単だったが、間接引用が難しかったとするものや、スムーズに文章をつなげることが難しかったといった記述が見られた。また、資料が無かった場合や、テーマが難しすぎた場合、あるいは情報カードを適当にしていたり少なかった場合に、スムーズに進まな

かったとする傾向が見られた。

3. 2. 3. 2 「楽しい」という感情

次に、「楽しい」という形容詞であるが、「楽しい」は203件がカウントされ、すべてのStepで上位5番目以内に位置し、表1の抽出語単純集計でも53位に位置している。各ステップを楽しかったとするコメントに加え、「本を読むこと」の楽しさ(9件)、興味のあることを調べる楽しさ(12件)、論文を書くことに対しても楽しかったとするものが26件見られた(表9参照)。

表9 論文執筆の楽しさに関する記述(一部)

何回も試行錯誤して大変やったけど、楽しかった。書き始めるまでは不安やったけど、始めるとすらすらできて楽しかった。
アウトラインを変えながら書いたとき次々と書きたいことが出てきて書いてて楽しかった。書くのはとても楽しかった。もっと時間があるならもっと調べたかった。
6,000字も書いたんだなあという思いでいっぱい、眺めているのが楽しかった。結論を書き、さらに調査を続けていきたいなあと本気で思った。
書きたいことがたくさんできたことが、嬉しかったし、書き始めたら楽しかったのは事実です。やっぱり自分の好きな分野を調べられるのは楽しいなと
なんか不完全燃焼な感じです。最初はすごく嫌だったけど、書き始めると楽しかった。だいたいの流れはわかったので次はもっと効率よくしたいと思う。
早くに取り掛かっていればよかったと後悔しまくりです。でも、論文書くのは楽しかったです。
比較すると、仕上げのころにはたくさんアイデアが浮かんで、論文を書くのが楽しかった。論文を作成するのは、意外に楽しいものだと感じた。
論文を書くのが一番楽しい時期でした。
論文完成まで長い道のりでしたが楽しく書くことができてよかったです。
書き始めは楽しかったけど、だんだん不安になってきました。
書き始めると以外に楽しく、とまらなくなり、気づくと8,000字を超えるまでになっていました。
間に合ったという「緊張緩和の笑い」が合わさった笑いです。論文書くの楽しかったです!!
文章を書くのは楽しかったです。
気づいたら6,000字を越してびびりました。また書いていくうちに楽しくなってきた。
大変だと思っていたが書き始めると案外楽しかった。
答が載っている文献を見つけると書くのが楽しくなってきた。
自分の好きなことを書くので楽しくできました。

6,000字ということにまず驚きました。けど、書いているうちに楽しくなってきた、本を探すのも苦じゃなくなってきました。
書けるか心配だったけど、書きだすと楽しくなってきた、いっきにできた。
書き始めるとなかなか止まらず、楽しく書くことができました。

3. 2. 3. 3 達成と自信

次にポジティブな言葉として「達成」を挙げておく。「達成」については、単純集計による出現数では70番目で141件のコメントが確認された。これらはほとんどが、書き上げたときの達成感について述べたものである。

「論文が完成したときの達成感は何ともいえないものでした。」

「しんどかった。本当にその言葉に尽きる。でも、達成感は大きかった。」

「論文を書き上げたとき、今まで味わった事のないような達成感と爽快感を味わいました。」

「地道な作業が多くて今期で一番しんどい授業でした。でも達成感も一番ありました。」

「苦手だった論文を仕上げられたことにとっても達成感を感じた。」

「出来上がったときは、私にもできるんだと思ったし、達成感がすごくあって、うれしかった。」

また、ハードルの高い課題を仕上げたということが自信につながったとするコメントも見られた。

「この論文を仕上げたという達成感と同時に自信がついてきた。」

「6,000字の論文を完成させた時の、達成感は嬉しかったです。また自信にもなりました。」

「この6,000字の論文を仕上げた時は、すごく達成感が味わえたし、これからの自信につながりました。」

「論文提出できてすごく嬉しいです！すごく自信がつきました！この達成感を忘れずに、いろんなことにつなげていきたい！と思える授業と論文制作でした」

「投げ出したくなる時もあった。しかし、書き上げてから全文を見返した時、達成感がとてもあった。これを書き上げたことが自分の自信にもつながると思う」

初年次の論文作成については、一定程度の負荷を掛けることが学生の能力や意欲を向上させる側面もあるだろう（高松，2008, pp. 60-61）。また、課題をこなしたことによって自信を得る効果が見られたことは、自己効力感が低いとされる学生に成長をもたらすきっかけとなると考えられた。

なお、表4の大学の8位、短大の9位（表5）に位置した「嬉しい」という言葉は、資料が見つかったときの喜びや知りたいことがわかった喜びが9件、教員にほめられたこと

や対応に対する喜びが3件、その他はすべて論文が完成したり、完成に近づいたときに嬉しかったという報告であり、「達成感」が「嬉しい」という感情をもたらしていた。

3. 2. 4 ピア・サポート

調査分析の最後に、こうした負荷のかかる状態に追い込まれたとき、学習者を支えるものが何かについて見ておきたい。学習支援者としての教員のみならず、図書館や家族、共に同じ課題に取り組む友人たちは、学習過程でどのような役割を果たしているだろうか。アンケートでは最終的に指導教員への感謝も多く述べられるが、ここでは教員以外の「図書館」と「友人」について見ておきたい。

3. 2. 4. 1 図書館利用

まず「図書館」については、本科目が図書館の情報資源を有効に活用することも授業の目標としていることもあり、大学・短大共に「図書館」の出現数は6番目に多いものとなった(表4、表5)。全体の抽出語の出現数でも11位に位置し出現数は679件であった(表2参照)。679件の内本学の図書館とわかるコメント数は176件であり、公共図書館(地元、近く、市立などの記述)の利用も73件が確認できた。その他は「図書館」とだけの記述であるが、資料を求めて大学の図書館に限らず利用していることが把握できる。しかし、図書館で本の探し方が分からず苦勞したことや、求めているような資料が見つからなかったとする報告もあり、資料探索のキーワードの設定や図書館の資料配置、資料選択などに対する指導、支援が求められるところである。

3. 2. 4. 2 支援者としての友人

次に「友だち」には「友達」「友人」等の表現があり、全体の抽出語では51件の出現数であった。各ステップに差はなく、友だちに教えてもらったり、チェックをしあうといった記述が多く見られた。

「中でも出典の表示の仕方は、友達などにも聞いてやりました。」

「書き方がわからず、友達に教えてもらいながら、必死につかっていった。」

「友達が府立図書館へ行こうと誘ってくれたので学校より大きな図書館で学校にはない本も手に入れることができた。」

「友達に見てもらい、意見をもらったり私も友達の論文を読ませてもらったりなんかしてお互いにミスを直しあったりしたのが人の論文から学ぶことが多くて勉強になりました。」

「作文とはまた違うので書き方が分からず、友達に相談したりして、少しずつ自分の中で整理していきました。」

「上手くまとめれなくて、友達に何度もチェックしてもらったりしました。」

また、同じ内容で学ぶ中で、励みになる存在であり、こうした状況を乗り越える上で友

だちの存在が大きいことを伺わせる記述も見られた。

「友達も同じように頑張っていたので私も頑張る励みになりました。」

「友達がいたから、頑張れました。」

大島（2007, p. 62）は初年次のレポート作成プロセス全体を通して、「困難に陥ったときに学習者が準拠・参照したものとして」、サンプル教材や教員に加え学習者間の相互評価を取り入れることの有効性について述べている。そこでは同じ課題に取り組むものが相互にチェックすることで、相互の成果物や活動もまた有用な支援となり、相互に評価する行為がテーマへの理解を深める効果があることを示している。

3. 2. 5 動詞に見るステップごとの活動の推移

学習者の不安や苦勞したことはステップによっても異なることがわかったが、ここでは各ステップにおける学習者行動の変化について検討する。各ステップで、学習活動における諸側面の推移を見るために、動詞に注目した。各ステップで出現した動詞の単純集計の中から異なる活動を表し出現頻度の特に高い6つの表現（書く・思う・読む・調べる・考える・探す）に注目しステップごとの変化を見た。

表 10 ステップごとの活動

	Step1 テーマ の選択	Step2 事前 調査	Step3 仮アウト ライン	Step4 関連文 献調査	Step5 文献の 入手	Step6 情報 カード	Step7 最終アウ トライン	Step8 執筆と 校正	Step9 出典 表示	Step10 仕上げ
書く	416	70	275	52	43	204	279	399	110	212
思う	478	125	120	66	62	141	110	152	135	149
読む	133	149	33	128	64	93	43	26	13	41
調べる	78	162	70	115	41	14	28	11	21	21
考える	31	23	89	17	5	16	83	44	27	27
探す	16	81	8	128	106	16	28	2	1	3

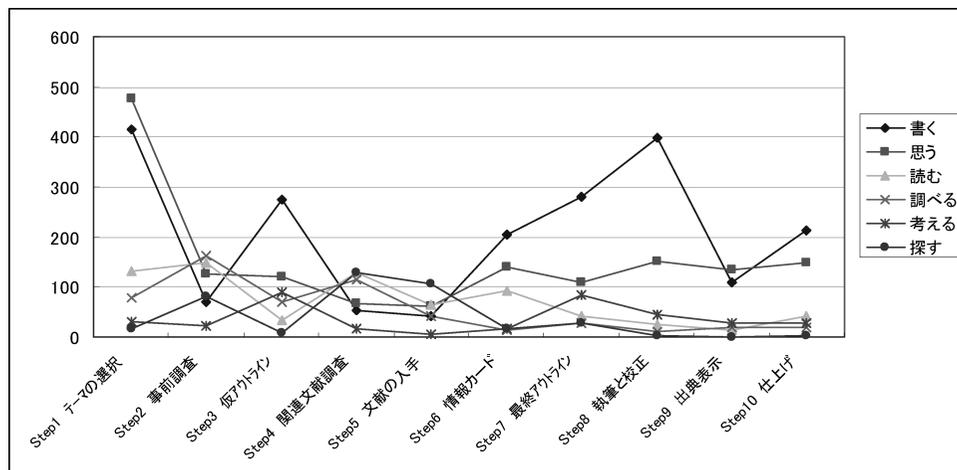


図1 ステップごとの活動

これによると、探索活動を表現する「調べる」は主に前半に行われ「探す」は中盤のStep4-5に集中して出現する。思索活動を表現する「考える」は主にStep3の仮アウトライン構想次およびStep7の情報カードやStep8最終アウトラインにピークが見られる。同じく「思う」は、Step1：テーマ選択でピークを示しながら「探す」とは逆の推移でStep4-5に底を打って後半上昇する。「読む」は、Step3：仮アウトラインの作成を除く前半部に多く出現し、もっとも出現頻度が高い「書く」は、Step1、Step3およびStep8：執筆と校正でピークを示している。Step1ではどのような文脈で出現しているかの詳細を見ると、これから論文を書くことや内容に関する抱負として述べられている。

このように、情報探索は、Stepの前半から中盤に行われ、アウトラインや情報カードの段階では、思索活動が活発に行われているように思われる。前半部分で「読む」活動の頻度が高く、「書く」は「探す」活動と逆の出現傾向を示している。学習者の思考的行動は初期段階の「思う」から探索行動へ移行し、「読む」行為を経て「考える」行為へと思考的態度を高めることが伺える。前節で述べたような苦労や困難さはそれぞれのステップで生じるが、ここでは資料や情報探索時の苦労、要約を含む文章の表現、構成に関する困難さが注目された。また、各プロセスで困難を感じた場合の友達によるピア・サポートの有効性が見られた。このことから、それぞれの段階で特に集中させるべき学習支援のポイントが明らかになる。

IV. 今後の課題とおわりに

4.1 本研究から見てきた課題

学習上の障害を克服するための要素として明らかになった仲間による支援は、今後授業における評価を、LMSを通じて学生同士で実施することは容易であるためそれを次のス

トップに役立てる方略を検討すべきであろう。また学習者を取り巻く環境は、記述内容の詳細から学内から学外の公共図書館等にまで広がっていることが分かる。学外図書館との何らかの連携や、eラーニングを通じた学習活動支援の方策も重要であると思われる。

今回の分析では、各学習者がどのようなテーマで取り組んだかを視野に入れていないが、主題によって本学の蔵書傾向がバイアスとなって資料発見の安易度等は異なることが容易に想定できる。また、提出された学習成果物のクオリティも分析対象には、入っていない。それらを分析することによって、本学図書館の集書計画に反映させていくことも考えられる。

さらに今回の分析対象となったデータは、小論文を提出することができて、提出時にここまでのプロセスを振り返ることができた学習者の記述データである。つまり小論文提出までたどりつくことの出来なかったケースの分析は行えなかった。小論文作成過程のどこかでドロップアウトしたケースの要因等を分析するには、別の手法が必要であろう。

4. 2 おわりに

本論では、各 step に沿って学習者にとって障碍となる要因が明らかになるとともに、それを克服するための仲間による支援等の要素も明らかになった。学習環境である図書館での資料探索が負荷になる過程も明らかになった。教室外での小論文作成の過程を複数年に渡る 600 余件の学習者の回想を追跡することで、最終的成果物がどのような学習者の主体的活動から生成されたかを分析した。今後求められる教室外での学習者主体の学習プロセスの全体像を把握することが、これからの学習評価には重要であると考えられる。

注

1. 初年次教育において、論文作成法を全学必修科目として設定し、実施している大学がまだ多くない。論文スタイルを全学共通とし、全クラスが統一された内容で学ぶこと、量的、質的にも充実した小論文を求める教育の実施に困難を感じている大学は多い。
2. LMS 上で実施するアンケート調査については、あらかじめコース開始時に当該コースで実施する全ての調査について、教育の改善とそれを目的とする研究分析に利用することがある旨の許諾を取って実施している。なお、対象年度を 2008 年度からとしたのは、大学・短大共通の「自己形成スキル」が開設され、リテラシー科目群の構造が一定の完成を見たことにある。コンピュータスキル、情報探索と論文作成スキルに加え、読み書くというリテラシーの基礎を築く科目が揃い、相互に連携しながら授業を展開する構造ができ、学生のリテラシー状況を視野にいれ、その補強が行える体制が確立されたことになる。
3. 内容分析（計量テキスト分析）もしくはテキストマイニングのためのフリーソフトウェア
4. 奈良先端科学技術大学院大学松本研究室で開発された形態素解析ツール
5. 大学生の読書や活字離れに関する調査に 1987 年、1991 年に発行された大学生協連読書調査委員会 (Ed.)『大学生の読書生活』、『大学生の読書と電子メディア利用に関する調査研究』（堀，前川 & 古谷，2000）、2005 年 11 月～2007 年 6 月サントリーが実施した『若者のメディアライフス

タイル調査』などがある。本学学生の読書状況については、初年次必修科目である「自己形成スキル」の中でアンケートを実施しており、授業開始時の「論理的な文章（新聞記事、論説文、各種解説書など）を理解する力」が無い、あるいはほとんど無いとしている回答は60%を超える結果となっている（手嶋、川崎 & 小松, 2009, p. 130）。

参考文献

- 大学生協連読書調査委員会 (Ed.). (1987). 大学生の読書生活. 1987年版. 東京: 全国大学生生活協同組合連合会.
- 大学生協連読書調査委員会 (Ed.). (1991). 大学生の読書生活. 1991年版. 東京: 全国大学生生活協同組合連合会.
- 堀薫夫, 前川敦子 & 古谷嘉隆. (2001). 『大学生の読書と電子メディア利用に関する調査研究』. 大阪: 大阪教育大学生涯教育計画論研究室・大阪教育大学附属図書館. Retrieved 29 September, 2011, from <http://ir.lib.osaka-kyoiku.ac.jp/dspace/handle/123456789/3557>
- 逸村裕 & 種市淳子. (2006). 大学生のサーチエンジン情報探索行動の分析: タイムサンプリング法を用いて. 『名古屋大学附属図書館研究年報』, 4, 1-12.
- 中島悠, 土方嘉徳 & 西田正吾. (2004, 5. 21). 検索経験と領域知識のWWW情報検索行動に与える影響 (一般セッション (1)). 『情報処理学会研究報告・HI, ヒューマンインタフェース研究会報告』, 2004 (51), 25-32.
- サントリー次世代研究所. (2008). vol. 1 「若者たちを取り巻くメディアライフスタイルの実態とその将来像」. 『若者メディアライフスタイル調査』. Retrieved 29 September, 2011, from <http://www.suntory.co.jp/culture-sports/jisedai/active/report/media/index.html>
- 種市淳子 & 逸村裕. (2006). エンドユーザーのweb探索行動: 短期大学生の実験調査にもとづく情報評価モデルの構築, 『Library and information science』, (55), 1-23.

引用文献

- 中央教育審議会. (2009, 12. 24). 学士課程教育の構築に向けて. 文部科学省.
- 舟橋宏代. (2010, 3. 20). プロセス・ライティングを支えるミクロの課題: 学部留学生のレポート指導に求められるもの. 『鈴鹿国際大学紀要 Campana』, 16, 89-99.
- 濱名篤. (2004, 5). 大学生にとっての円滑な移行. 『大学教育学会誌』, 26 (1), 37-43.
- 細谷美代子. (2010, 3). 初年次学生の「読み」に関する一考察. 『筑波技術大学テクノレポート』, 17 (2), 54-59.
- 大島弥生. (2007, 6. 23). 大学初年次のレポート作成授業におけるライティングのプロセス. 『言語文化と日本語教育』, 33, 57-64.
- 高松正毅. (2008, 12). 初年次教育におけるアカデミック・リテラシー教育の位置と大学教育の問題点. 『高崎経済大学論集』, 51 (3), 51-65.
- 手嶋英貴, 川崎千加 & 小松泰信. (2009, 3. 1). 大学一年生を対象とする学習スキル教育とキャリア教育の融合: 大阪女学院大学「自己形成スキル」の試みから. 『大阪女学院大学紀要』, (5), 119-144.

資料1 苦労一本(資料) -不足

資料	もなかったから、少し範囲を広げて児童労働に変えた。
資料	がなくて大変でした。でも自分の視野が狭かったことにも気づけ
資料	がなくて苦労しました。思ってるような本はなかなかないことを実感
資料	があまりなかったが、食品の安全で調べることによって関連していることが分かっ
資料	がなかったから、地元の図書館などから本を取り寄せた。
資料	がなさすぎても困るとわかった。少子化に関して書いてそうな本を
資料	がなくて、すごく大変でした。でも、今では情報カードもすごく役に立った
資料	がなかなかなく 調べるのに苦労した。
資料	がなかなかなかった 本を調べたり、テレビでの情報をいかに根拠のあるもの
資料	もなかったし、あっても難しく理解しにくかった。本をたくさん読ん
資料	があまりなく困った。(↓) 関連文献集めと同様、(↓) あまり資料を見つけることができ
資料	があまりなかったので焦った。関連する本があまりなくて焦って
資料	がほとんどなかったため、本をたくさん借りてアトピー性皮膚炎について調べた。
資料	がなかったため、利用していない。ひとつの内容についてまとめることができる
資料	があまりなさそうなやつは書くのをあきらめた。(↓) ブランドとユニクロをどの
資料	がなくて、何度も書き直した。図書館で、関連するエリアにある
資料	があまりなかった。無謀だった。範囲が広すぎた。文献がすくなかつ
資料	がなかったので苦戦した。先生に助けてもらったのでいいのが
資料	がなかったので、苦労した。どれを最初に持ってくるかで悩ん
資料	がなかった。サイニーからの雑誌記事を利用した。大変だったけど
資料	があまりなく、逆に困った。もともと知識があった あまりてこずらなかつた
資料	がないことに、不安を感じ、やる気がなくなった。先生に頼ってしまっ
資料	がなく私が働いているマクドナルドに直接届く CSR レポートなどを使って論文を仕上げる
資料	はあまりなく、どっちかという、私はやりたいような内容を参考
資料	がなかったりしてけっこう苦労しました。最終的には自分の題名にあつ
資料	がなく、諦めて違う「不安障害」というテーマを選びました。
資料	が全然なく、少ない資料の中から情報カードを作成するのはとても大変でした
資料	があまりない題にしたのは失敗したと思いましたが、最終的
資料	がないのに苦労した。でも少ないからこそ、1冊を真剣に読もう
本	が図書館になく、探すことになりに苦労した。図書館で本を借りたり
本	はなかなかないことを実感しました。興味あることがたくさんあったから作り
本	がなかったから、インターネットで調べた。少し怠った部分がありました。
本	があまりなく本当に論文の提出する前は、とても焦り地元の図書館へ走りました
本	なども読んでなかったもので、とにかく温暖化と経済についてひたすら書いてました。
本	は、近くなかったので、なかなかほしいものが見つかりませんでした。作成
本	しかなくて困った。書きたいことがなかなか決まらなかったで、アウトラインもなかなか
本	があまりなくて苦労した。借りられてる本が多くて苦労した。
本	やページがあまりなくてびっくりしました。情報カードはあまり作ってないです

本	はあまりなかった。論文調のものが多くて、読みづらかったので地元の
本	がなかったけど、しらべていくうちに昔のことも調べなければいけない
本	や雑誌がなく、探すのが大変だった。事前調査をしていると
本	があまりなくて大変だった ひととひとつちゃんとやるべきだった 本を読ん
本	があまりなかったりと、いろいろ大変でした。まず児童労働のどんなことを調べ
本	を借りる習慣がなかったため、本を借りるのも大変でした。児童労働

資料2 苦労（大変）一本一読む

本	を読む習慣がなくて、読んでも小説ぐらいだったんですけど、情活
本	を読む習慣がなかったため、不慣れなことで なかなか手をつけられなかった
本	を読む習慣がなかったので苦労したが、人生で初めてこんなにも本を読んだ
本	を読む習慣がなかったので、本を借りても読む気が起らない自分に
本	を読むことがないので、何冊も本を読むことがとても辛かった。
本	を読む習慣がなかったので、本の趣旨を把握するためにはだいぶ時間を

図書館が好きになりました。本を	読む	のが大変だった。情報カード作りをがんばったわりには論文に少ししか使えなかった
6,000字となると通して	読む	のも大変で、結構悩んだ。
マンガ以外の本を読むのは苦手なので、情報カード作成のために本を	読む	のが大変でした。
簡単に入手は出来なかった。本を	読む	のが大変だった。情報カードを作る分その本を読まないといけないので
達成感がやばい!!すつと調べたいことが出てきた 本を	読む	のが大変だった
最後の500字がなかなかでてこなかったり、雑誌がむしろ多すぎて	読む	のが大変だったなど、
核兵器・原子爆弾・法律などさまざまな視点から	読む	のは大変だった。おもに学校の図書館で探した。
自分のためにもと思って、頑張ってる	読む	だ。すごく大変だった。
日ごろ本を	読む	ないから大変だった。
自分の興味のあるテーマだったので何とか乗り切れましたが、新聞記事を	読む	理解することが大変だった。
それを読者に説得するための構成が難しかったです。	読む	切るのが大変でしたが、多くの図書に触れられた事にすごく満足感
本をたくさん借りて	読む	のも大変でした。自分が、読んだ事から何を言いたいのか
文献がけっこうたくさんあった。難しい言葉や言い方ばかりで書いてある本が多くて	読む	のが大変だった。関連する本がたくさんあったから読むのが大変だった
本が多くて読むのが大変だった。関連する本がたくさんあったから	読む	のが大変だった。引用ばかりしてしまっ て自分の意見をあまり取り入れ

しかし後からもっと考えればよかったと思いました。本を	読む	のは大変でしたが、雑誌を探すのは大変でした。
とにかく図書館の本をたくさん借りて読んだ。普段本を	読ま	ないので大変だった。
毎日課題がある中で本を	読む	のは大変でした。文献は主に図書館で入手しました。
たくさん見つかってもどの文献を使えばいいのか悩んだ。たくさん本を	読む	のが大変で、今までで一番本を読んだ気がする。
本	読む	のが大変だった。よくわからなかった。あまりいい材料がなかった
情報が不十分なのでたくさん本を読む必要があり、普段本をあまり	読ま	ないので大変でした。図書館で借りました。
後半になってから資料をたくさん	読む	のは大変だったので、もっとちょっとずつ読んで他の資料も集められたらよかった
何について調べるかを考えたりと、難しいことはたくさんありましたが、何より本を	読む	ことが大変でした。
いろんな本を読みました。日頃本をあまり読まないで、	読む	ことが大変でした。今まで生きてきた中で、一番図書館にいった
あまりなかったので、(↓)雑誌から引用しました。(↓)ただ、専門用語がほとんどで、(↓)	読む	のが大変でした。先生がくれた雑誌はとても読みやすく、とても役に立ちました
論文は結構範囲が絞り込められなく広がったので、文献がたくさんあり、全てを	読む	のが大変でした。すべて join から借りました
日本語が苦手なので本を	読む	んが大変だった。
情報カードの作成では難しい文体で書かれた資料を	読む	ことが大変でした。資料を読むという作業にとっても時間がかかってしまいました